救命

市立札幌病院　救命救急センター
牧瀬（まきせ）博（ひろし）　部長

一刻を争う患者の命を守るのは我々のチームワークと皆さんの心掛けです

救急車やヘリコプターで次々と運び込まれる患者を、365日、24時間体制で受け入れる救命救急センター。牧瀬さんは息つく暇もないその現場の救命医だ。

搬送される患者は年間千人以上。心筋梗塞や脳卒中などで倒れ、生死の境をさまよう重篤な患者ばかりだ。「救命医療に欠かせないのは、医師をはじめ、看護師や臨床検査技師らとのチームワーク」と牧瀬さん。急病人の搬送と同時に、意識、呼吸、生命反応、年齢、性別、体格…分かる限りの情報をチームで共有。最善の方針を決め、治療に取り掛かる。

救命救急センターでは、より多くの命を救うため、心臓手術に利用する「人工心肺」を応用している。人工心肺は一時的に心臓と肺の役割を果たす機器だが、改良を加え、短時間で脳に血液を送れるようにしたのだ。「命を守ると同時に、障がいなどの後遺症を防ぎ、社会に復帰する可能性も高められる」。患者にとってのベストを追求した一つの成果だ。

命を守り、社会復帰の可能性を高めるには、治療開始までの時間を短くすることが望ましい。そこで牧瀬さんが問題視しているのは、救急車を安易に利用する人が後を絶たないこと。市内では31台の救急車が年間約7万5千回出動するが、擦り傷や風邪での要請もあり、その間、本当に必要な人が利用できないこともある。「救急車はタクシーではなく、一刻を争う患者のためのもの――そう心掛けていただくだけで、救われる命があります」。救命の最後の砦（とりで）として、今日も牧瀬さんは命と向き合う。

緊急搬送された患者の処置室。刻々と変化する患者の容体を確認し合いながら迅速に治療を行う▶

INFORMATION

命を守る技術を学ぶ講習を行っています

急病人が出たときの正しい行動や、救急車が来るまでの応急処置を学ぶことができる講習を毎月実施しています。心臓マッサージや人工呼吸の方法、AEDの使用法などを、実技を交えて身に付けることができます。5月に実施する講習については本誌26ページに掲載。いざというとき、身近にいる人の命を守る力になります。

［詳細］防災協会 ☎861-1211

DATA

平成21年　市内の心肺停止者の1カ月後生存率　**24.5%**

全国の平均は11.4%。このほか、心肺停止者の1カ月後社会復帰率は札幌市15.2%、全国平均7.1%となっている。